

善光寺だより

十二回忌法要を営む

四月上旬、米国ロサンゼルス禅センター主管
前角博雄老師はじめ、ニューヨーク禅コミュニ
ティ主管グラスマン徹玄師、ニューヨーク禅マ
ウンティンセンター主管ローリー大道師、オレ
ゴン禅センター主管ベイズ澄禪師が来日。四月
十一日善光寺において、ベイズ澄禪師を導師に
ロサンゼルス禅センター法類による模庵白純大
和尚十三回忌法要が営まれた。

春季茶会開かれる

五月十八日（土）午後一時より恒例の茶道教
室（裏千家）主催の春季茶会が開かれた。本席
掛物は総持寺禪師さまの「杜鵑山とくせんに啼ないて風竹



裂る」折から山内は緑濃く、各茶席は一期一会の
の衣服を楽しむ大勢の参会者で賑わった。

皇居内特別参観と隅田川くだり

六月の声を聞くと時を同じうしてツユ入りとなり、三日間うっとうしい雨続きだったので、

「この分では…」

と誰しもが案じていた天気、五日当日はうって変って雲一つない快晴となる。これひとえにお不動さまのご霊験と、感謝感激、嬉々として出発する。

七時善光寺前を出発したバスは、

八時、横浜駅西口天理ビル脇でここに集合した人々を乗せたバスと合流して七台となり、一路皇居に向かう。

九時半、二重橋前に集合待機していた参加者を加え総勢二五〇名、桔梗門より皇居に第一歩を踏み出し、窓明館に入って少憩ののち、爾前の説明に耳を傾ける。

今から四〇一年前の天正十八年、関東に移封された徳川家康がここに入城し、爾来幕府の終焉まで二七八年間、徳川幕閣の総府として事実上日本の政治の中心としての地位を保ち続けた江戸城。

明治元年、明治天皇が京都から東京に都を移し、ここを皇居と定められてより、明治、大正、昭和の三代にわたって、数々の重要な国家的行事はすべてここでおこなわれて来た宮城、皇居。昭和二十年、戦火により一部炎上したが、戦後、混乱がおさまるにつれ、宮殿再建の声があ



がり、昭和三五年、再建事業は現実には第一歩を踏み出し、約十年の歳月を費して今日の威容がととのつた。

一行は係官の誘導、案内で、新宮殿―宮内庁―道灌堀―江戸城天守台跡―呉竹寮―東御苑―と、約一時間半足を運びながら、好奇のまなごしをかか^がやかせた。

皇居を退出して築地の料亭で昼食をとり、浅草の観音さまに向つた。

「浅草の観音さん」で通っている浅草寺は推古天皇の三六年（六二八年）、土地の漁師の投網にかかつて隅田川から示現した観音さまを御本尊に祠っている東京最古の寺である。のちに慈覚大師が「お前立本尊」を刻んで中興し、大江戸の発展を背景にして栄え、天下の観音霊場となつて今日に及んでおり、日に数万人の参拝者があるという。

ちなみに浅草寺は坂東十三番の札所になつて

いる。「江戸自慢 十三番がこれくらい」という古川柳があるが、これは、浅草寺が坂東札所第一番でないことへのあてこすりであろう。

浅草の観音さまをお参りして、次は水上バスでのんびり隅田川くんだり。一名「橋めぐり」ともいわれるこの舟くんだり、橋の多いのに一驚する。そして、二十五万平方メートルという広大な浜離宮に上陸、ここは潮入池を主体とした回遊式臨海公園で、皇居同様、東京都内を忘れさせる風光明媚の庭園を散策して四時半、解散。

まことにすばらしい清遊の一日で、参加者一同、いのちの大洗濯ができたと大よろこび。

主催者、善光寺黒田方丈、並びに伊藤婦人会長、充実した日程になかなかあいさつの機会が得られず、結局、水上バスの中で、一階二階に分かれてのごあいさつとなったが、これまた時と処を得た恰好のものとなった。